黄金律の解釈

ロータリーの奉仕理念を具体的に職場で実践するための「道徳律」を制定する作業が、1913 年のバッファロー大会で提案され、1915 年のサンフランシスコ大会において「全分野の職業人を対象とするロータリー倫理訓 (道徳律)」が採択されました。

しかしその11 条に記載された「すべて人にせられんと思うことは、他人にもその通りにせよ」という黄金律が、マタイ伝 7-12 の「Do unto others as you would have them to do unto you.」からの引用であり、宗教禁のロータリーの方針に反するという理由で、1931 年に道徳律の頒布が禁止され、1951 年には「道徳律」そのものが消し去られる遠因になったと言われています。

黄金律そのものの考え方が宗教であるか否かについては異論があり、むしろ哲学であるという意見が大勢を占めるようです。

イギリスのロータリアン、ビビアン・カーターが書いた「ロータリー解析 The meaning of Rotary」には次のような記載があります。

「ロータリー活動における究極の目的の第一は、すべての尊ぶべき事業の基礎として、奉仕の理想を奨励し育成することであるが、ロータリーそのものに、これを要求することは不可能であり、現実に、その真意が何であるかを述べることも難しい。多くの人たちは、それが黄金律からきたものであると説明しているが、数年前に、ロータリーの国際大会の講演者は、演説の中で、この黄金律の様々な表現方法について次のように解説している。

エジプト人曰く、自らが望んだことを捜し求めて、それを他人にしてあげなさい。

ペルシャ人曰く、あなたが人からしてもらいたいことを、人にしてあげなさい。

仏陀曰く、自らが望んでいる幸せを、他人のために捜し求めなさい。中国の哲学者曰く、あなた自身が望まないことを、他人にしてはなりません。

モハメット曰く、あなたがしてもらいたくないような方法で、あなたの兄弟たちを扱ってはなりません。

ギリシャ人曰く、隣人から敵意を抱かせるようなことをしてはなりません。

ローマ人曰く、すべての人が心に刻み込んでおかなければならない法律とは、あなた自身を愛するように社会の人たちを愛さなければならないことです。

モーゼ曰く、あなたが隣人からしてもらいたくないことを、隣人にしてはなりません。

ナザレのイエス曰く、すべて人にせられんと思うことは、他人にもその通りにせよ。

このように、奉仕理念は人間の思考と同じくらい古いものである。例え、宗教の教えと哲学の理論との差があったとしても、隣人に対し て己を捧げることが道徳上の義務であり、人生のすべての部門でそれ を適用することを、全体として説いたものであることには間違いない。

アーサー・フレデリック・シェルドンは 1913 年の年次大会で「効果的な能力に関する哲学と倫理 The philosophy and ethics of successful accomplishment」という表題で基調講演をおこない、その中で「すべて人にせられんと思うことは、他人にもその通りにせよ」

という黄金律の言葉は「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」というロータリーモットーと同じ意味を持っていると述べ、黄金律はロータリーの奉仕理念そのものであるという解釈をしています。

更に、教会でならば一週間に一回この言葉を述べながらお祈りをすればいいけれど、私たちのロータリアンは、各人が自分のためではなく、他人のために奉仕するというこの教えを守りながら、一週間に七日間励まなければならないと結んでいます。

2008 年 7 月 16 日